



日本リンホフクラブ会報

Japan Linhof Club (JLC)

VOL.3

2009年12月15日発行

〒113-0033 東京都文京区本郷 3-39-14 株式会社ワイズクリエイティブ内

TEL 03-5689-2776 FAX 03-5689-2786

日本リンホフクラブ会報制作委員会 (川太、北島、米澤、酒巻、事務局)

<http://www.linhof-club.com> info@linhof-club.com

大判写真は 生きる力です

吉田 幹雄

大判写真を始めて20年余、今もって有るべくもない？到達点を目指して写真を撮り続けている。成果はともかく、フィルムの空き箱だけは確実に増えている。

大判写真を始めた動機は、精緻を極めたパンフォーカスの風景写真に感動し、憧れたからに他ならない。「アンセル・アダムス写真集 アメリカ原風景」の写真で、さらに大判写真に傾注した。アンセル・アダムス(1902~1984)の関連書は、今でも最良の指南書となっている。

大判写真を始めるときに選んだカメラは、国産のフィールドカメラ4x5であった。当時の経済的理由と、大判写真の知識が乏しい状態で写真の機材を揃えたのだが、この事は後にLinhof MASTER TECHNIKA 2000に出会うまでの回り道のはじめとなった。

大判カメラで撮影を始めた当初は、しばらくの間、納得のいく写真が撮れないでい



た。原因は、大判カメラと撮影に関連しての基本的な理論と知識を明確に理解していない事にある、と分かった。そんな折、1994年に大判写真の学習塾に入る機会を得、会津若松から東京へ月1回約1年近く通った(現在の学習塾は短期間で修了できるようである)。修了後に塾関連の大判写真の会に入会し現在に至っている。大判写真の撮影会、会員同士の交流で得られる情報は、写真向上の大きな源になっている。

撮影した大判写真は、大きく引き伸ばすことでさらにその真価を発揮してくれる。所属している大判写真の会では、全倍に引き伸ばした写真の写真展を毎年開催している。作品を多くの人に鑑賞していただき、

批評を受けるのも写真上達には欠かせない。

今使っているLinhof MASTER TECHNIKA 2000は、フィールドタイプカメラの条件を十分に備えていて、いつも国内外で活躍してくれる。特に、47mm超広角レンズを使えるのが特徴の一つである。超広角レンズのパースペクティブで表現された写真は得難いもので、このカメラとレンズを大変頼りにしている。

これから先も、大判写真の撮影を続けることで、ハード(機材)とソフト(脳)を錆つかせないよう、生きる活力源のひとつにしていきたい。(福島県・会津若松市在住)

新年会のお知らせ (詳細は別紙)

- 日時 1月23日(土) 16:00~
- 場所 「湯島会館東京ガーデンパレス」3階
『平安の間』
文京区湯島1-7-5 Tel 03-3813-6211
- 参加費 7000円

講師の先生方にもご出席頂く予定です。是非ご参加下さい。

皆様とお会い出来るのを楽しみにしております。



小池 潜プロに聞く

北アルプスで双六小屋、黒部五郎小舎、鏡平山荘、わさび平小屋4軒の山小屋を経営し山岳写真家としても著名な小池さんに岐阜県高山市にある事務所にてお聞きしました。

Q1. 山小屋経営の傍ら40年余も山岳写真を続けるエネルギーの源泉は？

中学生の頃から夏になると毎年双六岳に登り、父親の経営する双六小屋の手伝いをした。都会が好きだった私は、大学を卒業して東京で勤めようと思っていたが、父がどうしても帰って来いと言うので嫌々帰ってきた。兄に代わり双六小屋をやるようになり、兄が使っていたセミパールとマミヤプレス一式をもらい写真との関わりが始まった。

山小屋を訪れる山岳写真家にも恵まれた。槍ヶ岳山荘の穂苅貞雄さん、田淵行男さん、近藤辰郎さん、横山 宏さん、川崎 研さん、山本和雄さん、前田真三さんなど多くの方から写真を教わった。

1972年山と渓谷社のアルパインカレンダーに2点入選した。当時はアルパインカレンダーが山岳写真の登竜門と言われた。その後毎年のように入選し、90年代の前半まで続いた。

田淵さんからはアルパインカレンダーはコンテストだから、小池君はもっとテーマをもった写真を撮るように薦められた事もある。山本和雄さんから「僕は穂高の山本だ。ポタ山(双六岳の意)なんか撮れるか」と言われ、ポタ山を撮れずして写真家と言えるかと言合いをした事もある。山本さんとは兄弟みたいな間柄で相当感化された。前田真三さんと知り合ったのも70年代。飛騨地方を案内して廻り山村風景を撮られた。案内をしながら写真を教えて頂いた。東京では前田さんの写真を何千枚も見せて頂いた。東京へ出かけて行くのが楽しみであった。写真があったから、山に惹き付けられたのだと思う。

Q2. 同じ山域で長年撮り続けても、まだまだ撮り足りないと言われます。それは何故ですか？

山は同じ表情の時は一度もない。気象条件や

季節によっても、撮影時間によっても変わる。槍・穂高を縦沢岳や双六岳に何百回となく通い写真を撮ってきた。山小屋にいるから「撮れて当たり前」と言う人もいるが、そんな風にはいかない。何十年も同じ所で撮っていてもそう容易ではない。年齢をとるにつれ物の見方も変わるし、気象条件だけに頼るのではない写真をもっと撮りたい。

Q3. 明るく、ほのぼのとした写真が多い印象です。その山に行ってみたい、同じ景色を見たいと思わせませう。

暗い写真は余り好きじゃない。昔、山岳写真は朝・夕でないと山岳写真でないと言われた時代がある。私は夏が好き。特に初夏が好き。真っ昼間、太陽が燦々と輝く時も撮りたい。紅葉真っ盛りもいいが、季節の移ろい、例えば晩秋ナナカマドの実や葉が少し残っている様なのが好き。山にある何でもない岩(例えば、岩稜の中の岩ではなく草原の中にある岩)、道、水、木などに惹かれる。山紫水明、日本の風景が好きだ。気象条件にたより稜線写真を何十年撮っても代り映えしない。

Q4. 双六岳周辺での写真が初めての人へお薦め撮影ポイントは？また、お好きな季節は？

一番のお薦め撮影ポイントは、双六岳の丸い砂礫台地からの槍・穂高連峰や西鎌尾根を前景に、雲海の槍ヶ岳。40年撮り続けても飽きない。初夏が好き。雪が来る頃の晩秋もいい。

Q5. カメラをリンホフに代えてから何年になります？

マミヤプレスから始めて、マミヤC2、パール、マミヤ RB(6x7)、トヨフィールド(5x7)、ゼンザプロニカなどを使ったが、この当時は中判・大判で撮る人が多かった。リンホフを持っていた人は僅か。ごく限られた人だった。最初のリンホフは、山溪の賞金とライブラリー丹溪で売れたお金で質屋に入っていたトランク一式のリンホフを友人と購入。私はボディ(IV型)、友人はレンズ全部。中古だったので歯ブラシで磨いて綺麗にした。うれしかったね。その次にマスターテヒニカ(V型)を求めた。

Q6. 4x5に拘る理由は何ですか？

4x5は情報量が多く、大きく伸ばせる。デジカメが進歩しても4x5並みになるには相当時間がかかるだろう。大判故に撮れなかった写

真も一杯ある。ライチョウ、オコジョ、蝶、熊、イヌワシや鷹などの猛禽類などデジカメで撮りたい。でも4x5をやめる気はない。もっと大きなサイズも使いたい年齢を考えると4x5までだ。4x5はアオリもきくし、ピントもよく分る。四隅まできちんと合わせるから構図がしっかりする。それに絶対に写る気がする。三脚を立てカメラをセットする。一枚撮るのに15分くらいかかる。時間をかけてセットするし、フィルムも値段が高い。安易な気持ちではシャッターは切らない。

Q7. 使用頻度の高いレンズの焦点距離は何ミリでしょう？

ジンマー120ミリ、ニッコール150・210ミリ、フジノン250ミリ。アングュロン75ミリ。

Q8. これ迄に撮影された4x5の枚数はどの位になりますか？ また、その保存方法は？

2万~3万枚くらいかな。この内3000枚ほどスキャンして(1.5m位に伸ばせる状態で)ハードディスクに入れた。でも入れてはみたものの、これからどんどん電子技術が発展して行ったらどうなるのか？写真集にしておけば残せる。これ迄に5冊(「雲ノ平・笠・裏銀座」「山の彩り」「黒部源流」「奥飛騨」「愛しき山陵」)写真集にした。

Q9. 最新作の写真集「愛しき山陵 双六岳めぐり」には約90枚の写真が使われています。用意した枚数は何枚くらいでしょう？

3000枚くらいの写真を1000枚に絞り、次に500枚ほどにして最後の枚数(90枚)を選んでいった。同じ場所で撮っていると殆どが槍ヶ岳と穂高岳になってしまう。槍・穂ばかりでは双六からの写真集にはならない。山と渓谷社には凄い編集者がいた。「山の彩り」の時は木村和也さん。「愛しき山陵」の時は節田重節さんに写真を見て頂いた。木村さんは妥協しない人で絶対にトリミングは許さなかった。ちょっと隅に気になる岩とかがあると、「僅かだからトリミングしたらいいではないか」と言っても「最初から四隅をきちんと見て撮って来い!」と譲らない。また、前田調を指摘され、用意した写真をバラされて取り直し。そこから抜け出すのに3年かかった。その間槍・穂高は殆ど撮らなかった。

—— インタビュアー(川太)所感 ——
優しい眼差しとゆったりとした飛騨弁の口調から数々の貴重なお話。高名な山岳写真家との交流、双六岳への弛みない愛情、衰えることのないエネルギーな制作意欲!アマにも大いに参考になるお話満載でした。

腰すえて じっくり景色を 作画する

藤原道広

趣味で始めた写真人生、はや40余年。最近パソコンやデジカメが一般的になり、写真もデジカメで済ませる事が多くなって来た。周辺の機材もデジタル化しつつある。そんな今春、当クラブの発足を知り、早速6月に入会しました。

私の住む鳥取県は、観光地として鳥取砂丘や大山(だいせん)が知られています。中でも大山は、ライフワークとして取り組

九州編 撮影地紹介

中村元信

九州といえばダイナミックな火山の光景を思い出す方も多いかと思います。いつも行く撮影場所は主に阿蘇山、菊池渓谷です。四季折々の風情が楽しめます。

阿蘇は春の野焼きから新芽が映える6月頃の草原風景、夏のユウスゲが咲く米塚、秋には阿蘇盆地に雲海が発生し、大観峰からはダイナミックな光景が楽しめます。また冬季は限られますが、雪景色が楽しみ、冠雪した火口から煙を上げる阿蘇山は豪快です。

菊池渓谷では新緑の頃がオススメです。水量も多く、苔の緑も水面に映え、無数の被写体があるといっても過言ではありません。また梅雨時には霧が発生し、夏の早朝の光芒は有名です。



んできました。昨年の夏は、念願だった大山の写真集の出版も終えたところです。入会を機にリンホフを持ち出し早速手入れ。この際とばかりにしザーを剥がしてパイソソレザーに張り替えました。もちろん自作。何度落としても壊れないのもいいですね。センター狂っても小槌で叩けば元に戻る優れたもの。磨くと出てくる真鍮カラーも魅力です。道具も使いこなすと分身になる。



あと一か所撮影場所を選ぶなら、久住山でしょう。男池周辺の原生林、ミヤマキリシマが咲く頃の牧ノ戸峠から指山周辺が見所でしょう。まだ大判を購入して2年ですが、そんな

4x5 サイズは、ポジフィルムだけでも鑑賞可能。撮る・見る楽しみ以外に、ネガコレクションも写真三昧の一つです。

使用しているフィルムは、ベルビア50、ベルビア100。クイックロードとカットホルダーの両方を使用。(鳥取県・琴浦町在住)

WebSite <http://hp1.tcbnet.ne.jp/~damfcm/>
※写真集:「伯耆大山の四季」(2008年発行)

自然の中でリンホフをじっくり構え、のんびりと3カット程度を撮り、帰りには温泉に立ち寄ります。現像があがるといつも4x5のポジに一喜一憂ですが、そんなスロークな写真ライフを楽しんでいます。
(熊本県・八代市在住)

《例会・撮影会報告》

■ 知新 温プロによるフードフォト W/S 報告 ■

特別実践教室として会報2号に寄稿頂いた「食空間カメラマン」知新温プロによるフードフォト W/S が開催されました。午前中のレクチャーに続き午後からプロ手作りの栗菓子と練り切りを180ミリを装着した（アオリの自由度の高い）ビューカメラ2台が狙う。光源はそれぞれコメットの400Wモノブロックストロボ1灯。カラーメーターで色温度を測定して光量を調節。入射光での露出測定。準備が整った所で参加者20名が二手に分かれてインスタントでまず撮影。その後被写体を変えてプロビア100Fで撮影。カメラの位置で構図が変化し、アオリの仕方ではボケ量が変わる。どの位置でどう撮るか？どれだけボカスカ？は各自の考え次第。

日頃ネイチャー撮影が多い会員にとって、ストロボもカラーメーターも縁遠い存在。またボケを活かす撮り方も稀。同じ写真でも随分と違う世界。本当に勉強になった7時間でした。レクチャーで語られたプロの語録をもう一度反芻してみるのも大いに役立つこと間違いありません。

■ 例会報告 ■

3回目の勉強会・講習会は10月24日に実施。マミヤデジタルイメージング社（福澤さん、荒巻さん）による、中判デジタルバックをリンホフカメラに装着しての花の撮影実践とシュナイダーレンズの性能と特徴の紹介。あの「食空間カメラマン」知新プロも興味津々の様子でした。シュナイダーレンズ+アオリ+中判デジタル=あなた次第！+銀塩（4×5）を越えるか？

午後は、コマーシャルから女性（ヌード）まで幅広く活躍されている大山謙一郎先生による講評。厳しくも丁寧な説明。また、先生の作品「よさこい祭り」の紹介がありました。（田中秋秀）

■日本リンホフクラブ 2010年度のイベント案内

《例会》

◎12月19日（土）技術勉強会、作品講評は湯島会館で開催です。

開催日	参加費	技術勉強会 10:00～	作品講評・講師 13:00～	備考
1月23日（土）	無料	現像・プリントについて クリエイト事業部	「回転アオリはピンピン、チョコビチョコビ」 清水 実（会長）※写真講評は無し	新年会（詳細別紙）
4月17日（土）	¥3,000	総会	近藤 辰郎	
7月24日（土）	¥3,000	未定	大山謙一郎	
10月23日（土）	¥3,000	未定	未定	

※予約の都合上湯島会館、湯島第2会館に変更になる場合があります。お問い合わせください。

《お申込方法、ご注意》

- (1) 参加希望のイベントを選択してください。
- (2) 日本リンホフクラブ事務局に電話、ファックス、メール等で参加希望の旨をご連絡ください。
- (3) イベント当日は時間遵守でご参加ください。なお、勉強会・講習会参加費は当日徴収致します。撮影会参加費は指定期日迄にご納入ください。
- (4) 勉強会・講習会のキャンセル可能日は3日前までとし、以降は欠席の場合でも後日参加費を徴収させていただきます。
- (5) 撮影会のキャンセルにつきましては、日数により取り消し料が掛かります。催行日20～8日前30%、7～2日前40%、前日50%、当日、無連絡、旅行開始後は100%となります。



《例会会場》

知新 温プロ語録

1. 何の為に写真を撮るか？ → レシピに残したい。後世に残したい。自分にしか撮れない写真を撮りたい。何を撮るかが個性に繋がる。
2. 自らピント・露出を決定して“自分の”写真を撮るように。自分が良いと思うものが一番良い。
3. ポジフィルムは印刷原稿用でラティチュードが狭い。ネガは、その反対。（然し）ポジに比べてディテールが出る。風景にもお勧め。従い、何を撮るかでフィルムを使い分ける方が良い。
4. 料理写真では、露出計の数値で撮るのではなく、ダイレクトプリントした時の適正を考慮して露出を決めるよう（少し明るめ）に。
5. 料理写真の主役は食べ物。食べなくなる様に周りをセッティング。ピントは食べ物に、周りはボケ。ボケをやり過ぎると“酔い”を感じる。ピントの範囲をコントロールすること。
6. 階調を出すこととピントを（意図的に）外す事とは違う。アウトフォーカスでも階調は出すこと。
7. 光の海で前後左右、被写体を包み込むのが料理写真の基本。

■ 撮影会報告 ■

第一回の撮影会が11月7日～8日初冬の上高地で開催され、19名の参加をえました。天気は良好、お陰で早朝の気温が下がり霧水で白くなった樹々目指して撮影に出向いた早起きメンバーも。落葉松の紅葉は終わり、穂高の山々は白銀とはいかず、参加者一人一人が初冬の梓川、小梨平、田代池、岳沢などをどう切り取り、作画していくか！大変いい勉強となりました。また、初日の夜は木戸インストラクターによるアオリの基本の勉強会もあり堪能した2日間でした。早くも次回の開催場所はどこ？との問いも。今回参加できなかった会員の皆様、次回は是非ご参加を！（平間省吾）

■ お知らせ ■

フォトコン 11月号のプロ・アマリレー連載『私のフィルムこの1本』欄に館野 進会員（宇都宮市在住）の作品が掲載されました。

毎月、プロカメラマンとアマチュアカメラマンの作品が交代で掲載されるこのページは、富士フィルム株式会社のフィルムで撮影したカメラマンとおきの一枚が見開き2ページを飾ります。

鳥海山の渋い秋を表現した4×5の作品「ブナの装い」（勿論リンホフで撮影）と、日頃の写真に対する姿勢とお人柄が感じられる文章、少し緊張気味で写っている館野さんの顔写真も好感度抜群！

※雑誌掲載予定等のある方は事務局までお知らせ下さい。

《編集後記》

早いもので、もう年末です。会員の皆様には、今年も手応え十分な作品が出来たことでしょう。今号も小池 潜プロ、知新 温プロから、“自分流写真作り”のお話を伺いました。また、たくさん撮って多くの人から批評を受ける事が上達には不可欠とお話も。

折角のリンホフカメラを活かすも殺すも自分次第です。良いお年を！次号は3月末発行の予定です。（川太）